

「サ、サ、イラシャイ、イラシャイ、ハルマキ、オイシアルヨ。タメスアルヨ。
オイシ ハルマキヨ！ タベテミルアルヨ！」

怪しげなフランス語が、良く晴れた日曜の朝のマルシェに響き渡った。

□

TOURSのフランス語学校。 2学期も半ばになっていた。

ひとりの中国人の女の子が僕たちのクラスに入ってきた。

この町に住む親戚を頼ってやってきたらしい。
明るく、人見知りしないオープンな性格、すぐみんなと友達になった。
小柄で丸顔の容姿は、いつもニコニコとしていて、周りの人間をなごます、そんな子だった。

□

「ねえ。今度うちに遊びに来ない？ おじさんたちとってもいい人達なのよ。
それにおいしいんだから。うちの料理.....」

ある日、肩のこる文法の授業が終わった後メイリーンが声をかけてきた。

彼女の明るい性格は僕も大好きで、あっという間に気の合う親しい友達になっていた。よく授業の後一緒にコーヒーなんか飲みながら、フランス人教師のまねをしたり、悪口ほざいたり、まあそんな冗談を言いながら笑い転げたりしていた。

「料理って？」

「あっ、そっか。まだ言ってなかったね。うち、というかおじさんのうちなんだけど
チャイニーズレストランやってるの。旧市街のそばで。とってもおいしいんだから。
ねっ、今度遊びにおいでよ。おじさん達紹介するからさ。いい人たちだよ。みんな。..」

「うん。じゃあ行くよ、今度。楽しみだな.....おじさん達に会えるの。」

と言いながら、僕は久しく食べていないチャイニーズを想像しながら一人ぼくそえんでいた。

□

「えっ？　なんでっすって？　もう一度言ってください！」

「だからね、日曜のマルシェでうちのハルマキを売ることにしたの。でも初めての事だし、人でもないから君にやってもらえないかなあってハナシ。もちろんアルバイト料ははずむからさ。歩合でもいいよ。売れた分だけ君にもバイト代が入るって訳。やっぱり同じ売るなら、アジア人が売る方がそれらしいだろう。フランス人には中国人もニホンジンも区別つかないからからさ。ねっ、いいだろう。それに君はそうゆうの好きそうな感じだしさあ.....」

□

遊びに来ないかと誘われた週の土曜日。　僕は彼女の書いてくれた簡単な地図をたよりにメイリーのうちにいった。　小さなチャイニーズレストランはすぐにわかった。思えば何度もこの前は通っているけど店に入ったことはなかった。金のない僕ら学生にとって外食なんてめったにないことだったし。

小さな店ながら居心地のよさそうなアットホームな雰囲気があった。店に入り、メイリーの友達だと名乗ると、年配の中国人が奥に向って大きな声で彼女の名を呼んだ。

「やあ。いらっしやい。さあさあ入って。よくきてくれたわね。すわって。すわって。ああ。　そうだお昼まだでしょ。少し早いけど食べていきなよ。ねっ。」

そう言うとさっきの年配の中国人を呼び僕を紹介した。

「はじめまして。***です。」

「やあ。よくきてくれたね。同じクラスらしいね。メイリーから聞いてるよ。メイリーは私の姪っ子なんだ。まだこの町に来て間もないからいい友達が出来て良かったよ。きょうはゆっくりしていきなさい。とびきりうまいもん腕によりを賭けて作るから。なんて、たいしたものはないんだけどさ。へへへ。」

そういいながらにこやかに奥の厨房に入っていった。

確かに人のよさそうなおじさんだった。

ひとしきりメイリーとおしゃべりをしていると、　まず酸っぱい辛いスープがでてきた。この国の中華料理屋では定番のスープだった。一口すするとコショウの香りが鼻を抜け、抜群においしかった。

そして次にハルマキが出てきた。日本のそれと比べると小ぶりのそのハルマキは、ソースのうまさも手伝って絶品だった。

「やばい！」きょうのラッキーさに僕は狂喜寸前だった。

そのあと野菜のいため料理やら、これもフランスの中華の定番、鴨のロースト、カナール・ラケが出てきて久しぶりの豪勢なランチに僕は酔いしれた。

おながはちきれそうになりながらお茶をすすっているとき、ニコニコと手を拭きながら厨房からおじさんが出てきて僕らの前にすわった。

「おいしかったです。どうもごちそうさまでした。」

僕はお礼を言うと、なんの、なんのとおじさんは手を振りながらあいかわらずニコニコとしながら大きくなずいた。

三人でしばらくなんてことはない話をしていたとき、突然としておじさんからある野心的な提案がなされた。そうハルマキ売りのアルバイトの一件だった。

「うちのハルマキは評判がよくてさあ。それで日曜のマルシェで売ってみたいかって話があってね。ただ作るのは問題ないんだが、売る人間がさあ。俺も年だし、かといってメイリーン一人にやらせるわけにいかないだろう。いろんな人間がいるからさあ。ああいうとこにゃ。やっぱり男手が必要なわけよ。それで君にどうかってそういうハナシ。」

確かにここのハルマキはうまい。この国でハルマキはポピュラーな食べ物だ。マルシェで売れてもおかしくないと思った。

「うう～～ん。」 「どうしよう。」 「こまったなあ。」

「ご馳走になっちゃったしな。」「.....」

暫くの間お茶を何杯もすすりながら、僕は、ウイ、ノンが定まらなかったが、なぜか、なにかがおこり魔が差したのか、「ウイ。」と言ってしまった自分に気づいたときはもはや手遅れだった。

こうして僕は、美しい古城で有名なロワール地方のこのTOURSという町で、なぜかハルマキを売ることになった。

「サ、サ、イラシャイ、イラシャイ、ハルマキ、オイシアルヨ。、タメスアルヨ。
オイシ ハルマキヨ！ タベテミルアルヨ！」

その日は秋晴れの空気の澄み渡ったすがすがしい日曜だった。

僕のハルマキ売りの初日を祝うように太陽も輝いていた。

僕は別段あのメイリーンのおじさんから頼まれたわけではないのに、ハルマキを売り始めてすぐに”中国人”になっていた。

中国訛りのフランス語で客に声をかける。

不思議だった。普通に話そうと思うとフランス語はまったくへたくそなのに、中国訛りのフランス語だとすらすらと口から出てくる。人間には秘めた才能があるらしい。

メイリーンがやってきた。

「大丈夫？ 売れそう？ 手伝おうか？」

「タイチョプ、タイチョブアルヨ。」

「なにそれい！」そう言って大笑いした。

「まったくもおお。心配なさそうね。じゃあおじさんに安心してって言うてくるわね。」

この地方の中心都市と言ったって小さな町だ。こうして日曜のマルシェの広場にいると知った顔が結構やってくる。皆ヒマなのだ。小さな町ですることといたら限られている。

特に同じ学校に通っているニホンジンの知り合いがやたらやって来る。

そしてマルシェの一角でハルマキを売っている僕をめざとく見つけて駆け寄ってくる者もいるのだ。

「何やってんの？ こんなところで。***君よう.....」

「何って、見ればわかるだろ。ハルマキ売ってんの。 そんなとこにつたってんだったら買ってけよ。うまいんだぞ。これ。なあ。」

そいつは「けっ、けっ」と笑って、ひとつも買わずに行ってしまった。

「バカヤロ。」

そんな冷やかしが何人かやってきた後、向こうから二人ずれのニホンジンの女性がやってくるのが見えた。

一瞬「やばい！」と思った。 が遅かった。

その二人ずれはTOURSの銀蠅（ギンバエ）と恐れられているオネエ様方だった。一人は元新聞社に勤めていて、やめてこの国にやってきたらしい。もう一人は銀行員をやっていたらしいが、やっぱり仕事をやめてこの町の学校に来ている。

このオネエ様方はうるさいぐらいによくしゃべる。人の噂も大得意だ。もしギンバエのオネエ様方に見つかれば。間違いなく明日にはすべての”TOURS日本人会”にぼくのハルマキは知れ渡るだろう。

早速新聞社のギンバエが僕に気が付いた。

「あら！***君じゃない。何やってんのこんなところで。 えっ！ハルマキ売ってる！

面白いことするわね。でもどうしてハルマキ売ってるの？ なぜここで……??」

追求は暫く続いた。しょうがないから差しさわりのない程度にいきさつをかいつまんで話すとやっと納得してくれて、

「じゃあ。5人分頂戴！」と言って百フラン札を出した。

気風が言い。

実は新聞社のギンバエは、この国に来てすぐに十歳も年下のフランス人の男を捕まえて今一緒に住んでいる。日本では考えられない荒業だ。そして二人の住むアパートには、僕は随分と御呼ばれされご馳走になっている。

そう僕はギンバエのお姉さま方にはとっても好かれてかわいがられていたのだ。僕も、決して日本では美人とはいえないギンバエだけれども、気持ちのやさしい、人の痛みがわかる彼女たちが嫌いではなかった。ホントいいオネエ様方なのだ。

五人分買った新聞社のギンバエにまけじと、銀行員のギンバエもメガネを少し持ち上げながら「みんなで食べるから。」と言って、何人分ものハルマキを買ってくれた。

ギンバエにはなぜか人を見る目がある。うるさいようだけれど決して間違ったことは言わない。僕はこの地でギンバエに好かれていてよかったとひそかに思っていた。

しかしある日、新聞社のギンバエに市庁舎の前の広場で 唐突に、
「***君、あなた禿げるわよ」と言われたときは唾然とした。
「だってこんなに毛があるじゃないですか。」と言うと、
「地肌が見えてるの。光りにあたって。こういうのは将来ハゲルの！」

悲しくもギンバエが正しかったことはその時は知る由もなかった。

ギンバエが去った後、キム先生がやってきた。

キム先生は日本の朝鮮大学校のフランス語の教師だった。フランスに来たのは今回が初めてだけど、フランス語は凄かった。なんでも辞書を全部丸暗記したらしい。けれど一度も日本から出たことのない先生にとって、生活は大変だったようだ。言葉はわかっても異文化のなかでの自分の立ち居地がわからずに苦労していた。日本にいては在日という僕達普通の日本人とも違う社会の中で生き、今はまた初めて西洋の地であがいていた。

「先生、ハルマキどう？おまけするよ...」

「いや、わかりません。なぜここでハルマキを売ってるんですか。不思議なことをしますね。あなたは。」

「キムチがないからハルマキ売ってんだよ。」

キム先生とはこれまでに何度も一杯のコーヒーを飲みながら”まじめ”な話を随分としてきた。それはある種それぞれが抱く文化論の開陳であり、カフェのテラスは有益な論議の場になり得た。もしキム先生と出会わなかったら、いまいるこの国の文明や、在日の問題ももっと遠くの存在として認識していたかもしれない。この出会いに僕は感謝していた。

「もっと早く若いときにこの国に来たかった。」
海外旅行もままならない国籍の壁。この先生の言葉が耳から離れなかった。

□

小さな女の子の手を両方からつなぎながら若いフランス人の夫婦がやってきた。女の子は4歳か5歳ぐらいか。ブロンドの髪を赤いリボンで結び、くりっとした青い目はとても愛らしかった。

「へえ。ハルマキか。これはおいしいんだよ。よくシノアで食べるんだ。」
そう言うと女の子のお父さんが覗き込んだ。

「シショクスルアルヨ。」と言って親子3人に小さなハルマキをひとつずつ渡すと、
「まあ。とってもおいしいわ。」とお母さんが言えば、お父さんも
「うん。うまいな。これはいけるぞ。」
小さな女の子もその小さな口でハルマキをほおぼると笑顔を僕に向けた。

そして今日は夫婦の両親を家に呼んでいるからと言って、たくさん買ってくれた。

「謝謝！」

□

「これ、いいだろう。えへへ。ほらっ。」

清川さんがいつものこげ茶のショルダーバックからなにやら四角いものを取り出して嬉しそうに僕に見せびらかした。

清川さんはもうじき日本の新聞社のパリ特派員になる。今はフランス語の勉強でこの学校にきている。

「なんですか？これっ。」

「だめだな。大きい頭してるのにわかんないの。」

「大きいって、前も言ったけど僕の頭は脳みそで大きいんじゃない、空気しか入ってないんですから。まったく。何ですか、それっ。」

「これはな.....石盤。」

「セキバン？」

「そう。昔は日本にもいっぱいあったのよ。子供がさあ、石筆で絵や文字を書いてさあ、つまり学用品ってわけ。紙だともったいないだろう。子供がさあ、いろいろ書いちゃ捨てるのに。」

「ああ。石盤ね。それで、そのう、それどうしたんですか？」

「買ったの。この間。まだフランスはこんなの売ってんだよ。おもしろいだろう。えへへ。」

「へえ。売ってんだ。それでどこで買ったんですか？」

「モノプリ！」

「モノプリってそこの？」

「そう。TOURSの。あ・そ・こ。」

「ほらみる。ほしいんだろ。だめだよっ。僕が先に見つけたんだから。はっはっはっ。」

清川さんに石盤を見せつけられてから、僕は彼の推察どうり欲しくて欲しくて仕方なくなつた。

この小さな町で目抜き通りにあるモノプリは、言わばこの町にとって唯一の大規模店舗でデパートのような存在だ。

一階は化粧品や日用雑貨。二階には衣料品や文具、おもちゃ。そして地下は食料品。まさしくデパートのごときだった。

普段ろくな鞆も持っていなかった僕は、いつもモノプリの赤いビニール袋を持って歩いていた。

”TOURSの町を歩けばモノプリの赤い袋を持った***と出くわす。”とTOURSの”日本人会”から揶揄されていた。さほどにいつもモノプリの袋を持って暇でぶらぶらしていた。

□

学校の休みの次の土曜日。僕は石盤めがけてモノプリに急いだ。

一階のいつもの安物のオーデコロンの匂いに迎えられ僕は二階に駆け上がった。

そしておもちゃ売りの隣の文房具売り場で物色。

ついにめざす”モノ”を発見した。

赤枠のもの、青枠のもの、二種類あった。

確か清川さんは青だった。僕は赤に決めた。

値段は学食一食分。まあいいだろう。

嬉しくてなんとなくやつきながらレジに向おうとしたその時、

近くにいた女の子が僕を指差し、隣の母親に向かって大きな声で言った。

「ネエ ママ、このムッシュウ、マルシェにいたハルマキの中国人じゃない？」

「そうだよ。あのひとだよ。ネエ、ママ...」

きっと母親と何かおもちゃでも買いに来たのだろう。

一瞬の不意を突いた少女の一言に、石盤を抱えてレジに向った僕の足が一瞬止まった。

その瞬間、僕は反射的にあのマルシェのハルマキ売りの中国人になって

「ポンチュール。」と中国訛りで言いそうになった。

しかしその直前、理性が目覚めた。

言うべきか、言わぬべきか。 う～ん。

しかし今はハルマキ売りではない。ニホンの友達に石盤をみせびらかすことだけを楽しみ

にここにいるニホンジンなのだ(??)。

手に持つ石盤とハルマキとはこの状況を的確に判断するにあまりに関係な事と知りつつ、今は石盤のニホンジンだという全く意味のない、根拠のない理屈を大きな頭にたたき出し、あのかわいい少女には申し訳ないけれど、その場を知らん顔して、一目散にレジに向って立ち去った。

ただ、ほんの少しの後悔を残しながら。

□

ロワールの秋は美しい。

僕はロワール河の支流のシェールにある中州にいた。
ここにいると街の喧騒も届かない。
ただただ”フランスの庭”と呼ばれるにふさわしいうらかな風景が広がっていた。

少しひんやりとした風が吹いてきた。
僕は、茶色く、黄色く染まった木々をみやりジャケットの襟を立てた。

もうじきどんよりとした季節が訪れるだろう。
秋の快い日差しを味わえる日は短いから。

久しぶりにどこかお城でも見に行ってみよう。

忘れえぬ日々がまだ続く。

*すべてフィクションです。
登場人物など似た者が在ったとしても全くの偶然に過ぎません。